慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古島敏雄著 近世における商業的農業の展開 : 社会構成史大系第八回配本
Sub Title	Development of commercial agriculture in modern Japan, by T. Furushima (the eighth volume of the "Shakaikoseishi-Taikei" distributed)
Author	服部, 謙太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.6 (1950. 12) ,p.447(83)- 450(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19501201-0083
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19501201-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

創痍をうけた民主主義は、今や已の脆弱な地盤を再認識すべき時にある。何故なれば民主主義は、危殆に瀕しているからである。

民主主義！　一體それは何者であろうか。一九三三年ナチスドイツの勃興によつて、祖國を追われたエドアルト・ハイマン教授が云つた次の言葉は、民主主義自體の危機をわれわれに教えるとともに、われわれの耳にし、口にするデモクラシーが、何ものであるかを意味深くほのめかしてくれる。『世界はあきらかに民主主義から離れている。……すなわち民主主義は民主主義に反對せんとする人々によつてさえも、無視しえざる道德的權威を持つているということである。それらの人々は、彼等が民主主義を撲滅しようとして、彼等の力を糾合している間にも、民主主義という名前の魔力を呼び求めざるを得ない』と。(E. Heimann, Communism Fascism or Democracy? 土屋清・土屋弘共譯一―二頁)まことに、デモクラシーの危機は、このようなそれ自體の保守的革新的性格の二重性から來るものではなかろうか。そしてこのデモクラシーの危殆は、そのまゝ資本制社會そのものの、巨大な基盤をゆるがすものでなくして何であろうか。(未完)

一九五〇・一〇・一

《附記》　本書の紹介は既に石上良平教授によつて行われている。(東洋經濟「ブック・レヴュー」第十四卷)筆者は不幸にして、參照することの出來なかつたことを遺憾とする。この拙い論文は、教授の紹介によつて補われるところ極めて多いことゝ信ずる。心ある讀者の併讀をお願いする。尙、今年の「思想」九月號は「ラスキー」特輯號として彼の生涯、業績、思想に關する有益な論文が掲載されてゐる。且つ又、本書は、最近笠原美子氏によつて飜譯、「みすず」書房から前半だけが出版された。なお、本論文は未完であることを附記しておく。

書評

古島敏雄著

『近世における商業的農業の展開』

――社會構成史大系第八回配本――

服部謙太郎

一

德川幕藩體制が元祿享保時代を劃期として解體過程に入り、農村構造が著しく變貌をとげてゆくことは、今日一般に認められている事實である。この變化は、農村構造を規定する農業經營の面からみるならば、いわゆる地主手作經營に代つて、零細小作經營が支配的になつてゆく過程であろう。零細小作經營の特色は、從來の自給自足的經營におけると異つて、貨幣支出による赤字を補うために、商業的農業への依存度が著しく高まつている點にある。そしてこの商業的農業の發展こそは、江戸時代社會のもつ矛盾の表現であると共に、封建社會を否定する契機の成長過程でもあつた。こゝに少くとも近代社會への發展の可能性が生れたことは事實であるが、しかし、商業的農業の展開、貨幣經濟の普及といつた現象が直ちにそのまゝ近代化への道を意味するものでないことは、こゝに說明するまでもない。江戸時代後期の商業的農業の展開は、地作手作的農民層を寄生地主と零細小作層とに分解せしめたが、近代社會成立の推進力たるべき、西歐の富農＝獨立自營農民の如きものは、遂にその間に生ずることがなかつた。その理由はどこにあるのか。この問題を解決するためには貨幣經濟の農村への浸透が農民層の分解とどのような關係をもつて行われてゆくかを、各地方の農業經營の具體的分析を通じて明らかにしてゆくことが何よりも必要であろう。このような意圖による最初の試みは、故戸谷敏之氏によつて行われた。(註一)戸谷氏は自給肥料か購入肥料かという肥料形態の差異を基準として、江戸時代農村を東北型(東北日本型)と近畿型(西南日本型)とに分け、更にこれを各地方の經營收支計算例の分析によつて吟味した結果、これらの型が單なる地域型ではなく、經濟發展の型を示すものであることを明らかにした。この見解は江戸時代の人々も漠然と乍ら意識していた農業技術の東北と近畿との對比を、學問的に推し進めたものであり、結論としては一應誰しも承服出來るのであるが、何分にも蒐集資料が頗る限られている上に、各地域の交換經濟への入り込み方の動態的理解が欠けている點は、欠陥として指摘されざ

るを得なかつた。戰後、堀江英一氏は戸谷氏の業績に基き、農産物の市場への參加の仕方から、江戸時代の農村を東北日本、西南日本、中央地帶の三つに分類し、夫々の性格を明らかにした。(註2)しかし堀江氏の見解は各地域の農業生産の具體的分析の上に出てきたものではなく、この點に大きな不滿が感ぜられた。江戸時代の農村に貨幣經濟がどのような影響を與えたかは矢張り兩氏の行つた如き一應の全國的展望もしくは類型化の上に立つて、更に各地方々々の農村構造、農業經營についての實證的研究の一層の推進なくしては十分に明らかになし得ないであろう。なぜなら、貨幣經濟もしくは商業的農業の展開の程度も各地方一樣でない上に、それによつて影響される農村構造自體も、地域差の激しい我が國にあつては、夫々に異つた歴史的性格をもつているからである。このような要請に答えるかの如く、古島敏雄氏のこの近業は現れた。

（註1）戸谷敏之氏「德川時代に於ける農業經營の諸類型」（アチックミューゼアムノート第十八）――昭和十六年
同氏「近世農業經營史論」第一章「江戸時代に於ける農業經營の諸類型」――昭和二十四年
（註2）堀江英一氏「封建社會における資本の存在形態」（社會構成史大系第八回配本）――昭和二十五年

二

第一章「江戸時代に於ける商業的農業の發展と農業諸形態」においては、次の諸點が指摘されている。

（1）明治一〇年の調査によれば、商品作物栽培の比率の高さは、東山、畿内、關東、山陽、四國、裏日本、九州地方の順であり、且つそれが自家消費のためでなく、廣い市場を目當てとして行われていることが明らかであるが、この狀態はほゞ江戸時代後期のそれを反映しているものと思う。

（2）一般に各地の自給的農業の中に商品作物が入つてゆく傾向は、元祿頃に大都市周邊に顯著となり、以後次第に廣範圍に及び、幕末には全國的な現象となつた。

（3）商品作物として需要の多かつたものは、綿、蓼藍、菜種、葉藍等であり、この中最も早く全國的な商品となつたものは綿で、元祿頃には綿作の中心としての畿内の地位は既に確立した。

（4）肥料の面から江戸時代後期の全國の農業をみると、畿内の大部分、東海、山陽、關東の平野地帶が購入肥料による他は、大部分が自給肥料の段階にあつた。

第二章「農業生産の類型と農民階層の分化」においては、以上の如き全國的展望の上に立つて、關東、中國（防長二州）、畿内の三地方をとり上げ、夫々の地方について、（1）商業的農業の特質、（2）農村における階層分化、（3）小作關係と小作料の三つの角度から究明する。

一、關東地方

（1）上野の蓼藍地帶、常陸の煙草産地、江戸近傍の野菜産地等の例外を除いては、大體に於いて商品作物の栽培は少く、したがつて商業的農業の發展は著しくない。

（2）その結果、農業生産の發展に裏づけられた積極的な農民階層の分化をみず、土地集中は主に質屋もしくは酒造業者の手によつて、高利貸を通じて行われたが、それすら最大五町乃至十町にとゞまり、一般には二、三町歩の小地主が多い。

（3）小作料は反當一石を越すものは少い狀態だが、生産力の低さにくらべれば、これでも相當に高い。

二、中國地方（防長二州）

（1）藨が專賣として把握した商品（櫨、櫨、紙等）以外の商品作物（綿、藍、菜種等）は、主として小地方市場を對象とするものであつて、全般的にみて特に顯著な商業的農業の發展はみられない。

（2）農民的商品生産の進展が少いに拘らず、相當高度の階層分化が行われており、本百姓と亡土＝門男（水呑層）との兩極への分解が進んでいるようにみえるが、一面この亡土＝門男層の身分的隷屬性の强さは、本百姓内部の分化とは異つた、古い身分階層を示すものゝようにも考えられる。

（3）土地集中は藨專賣下にある農村の窮乏化と結びついた商業高利貸資本によるものと豫想されるが、その程度は明らかでない。

三、畿内地方

（1）全體として他地方に較べて平均的に商品生産は高度化しているが、必ずしも全畿内地域の農業が高度に商品化しているわけではない。河内、攝津兩國の綿作の地位は他にすぐれて重要である。

（2）階層分化は高度に進行し、一般に水呑無高層の數が高率であり、且つその分化は明らかに商業的農業の進展と密接な關聯を有する。土地集中は余り大きくは行われず、五町乃至十町前後の地主が多い。

（3）小作料は一般に高い（一石乃至二石）。しかし生産力も高く、殊に攝津河内の綿作地に於いては、綿作によつて小作料をカヴアー出來るだけの生産力を有し、こゝにこの地方の自作農或いは小作農に上昇の可能性が認められる。けれどもこれ以外の地帶に於いては、生産力の增加部分は直接生産者の手中に入ることなく、商業高利貸資本としての面を强く持つ寄生地主がこれを取得して肥大するという傾向が一般的であつたらしい。

三

以上は本書の大要であるが、本書の最大の功績は、戸谷氏によつて與えられた江戸時代の農村構造に關する類型的な、それ故にやゝ抽象的な理解を更に深めて、各地の資料を豊富に驅使しての實證的研究の上に、あらためて整理を行つた點にあると思う。戸谷氏の場合、その余りにも單純化した類型化のために蓋盤地帶の多くが東北日本型に入れられたり、或は攝津型阿波型の區分が單に經營收支の面からのみ行われて、商業資本とその地の農業との結びつきの究明が等閑に附されたりした欠點があつたが、本書の著者は商業的農業の發展を、終始その地の農業形態との關連に於いて把え、且つ更に商業的農業の展開の基礎をなす農民層の階層分化の問題にまでつきすゝむことによつて、江戸時代後期の農村構造の變化過程について一應の全國的展望を與えることに成功している。固よりこゝに分析の對象としてとり上げられたのは三つの地方にすぎず（その中で野村博士の「村明細帳の研究」の資料を縱横に驅使しての關東農村の分析は本書中最も精彩に富んでいると思われる）、その他の諸地方については、すべて今後の課題として殘されているし、しかも商業的農業の展開は、各地方々々についてみても、同一地方内部でまた樣々の形をとつて現れる。したがつて同一地方の中の更に各郡、各村にまで檢討を加えて後に始めてその地方全體の構造把握も可能になつてくるのであつて、今後一層の地方的實證研究が必要となつてゆくであろう。本書はかゝる今後の研究方向に對して重要な礎石をおいた點において、高く評價されるべきものと思う。（一九五〇、一二、一〇）

經濟學會會則に基き委員會の承認を得た

贊助會員（敬稱略）

青木晴雄（内外編物株式會社内）
岩田健三（大和紡績株式會社東京支店）
古村義人（日東證券株式會社内）
本間利章（目黒區三田五十四）
近藤操（世田谷區代田二ノ七一八）
鹿島新吉（目黒區上目黒八ノ六八〇）
小林喜一（ライオン齒磨株式會社内）
森岡賢一郎（港區芝二本榎西町二）
町田戰三郎（大日本製糖株式會社内）
日本パルプ工業株式會社（千代田區丸ノ内一ノ二）
杉田信一（目黒區綠ヶ丘二三七五）
杉浦六右衛門（千代田區四番町五ノ六）
山本惠造（中央區日本橋室町一ノ六）

編集後記

この秋以來どこの書店へいつても氣付くのは、美しい裝幀のニーチェ全集がしかも幾種類も書架をかざつていることである。きくところによれば本年八月二五日を以て彼の死後五〇年を經過し著作權が消滅したのでかくてニーチェ・ラッシュとはなつた由である。

これはいかにも自主性のない日本の出版文化のありかたをあらわしたものと云えようが、しかし一面においてはニーチェに「救い」をもとめる一部の人々の内面性の衝動をもみのがしがたいであろう。したがつて現在のニーチェ・ラッシュが單なる狂い咲きとなるかどうかは歴史の審判にまつよりほかないが、いまだニーチェの問題を自らの問題とすべき正當にして充分な精神的地盤のない我國においては、所詮、豪華な全集も此國特有の敎養俗物ども――これこそニーチェの最も唾棄した連中なのだが――の一時的嗜好品としておわる見通しの方がつよそうである。（ひとはこゝに先頃のキェルケゴール・ラッシュの運命を想起せよ。）

だがニーチェ・ラッシュはひとり哲學界だけの問題ではない。同時に我が經濟學界の問題でもあるであろう。いずれにせよ國民的地盤のない「流行」のたどる運命は同一であろう。「なにがための知識ぞ？」ふるくして永遠に新しいこの問いをもう一度くりかえすのも意義あることであろう。

（遊部久藏）

昭和二十五年十一月二十五日印刷　第四十三卷
昭和二十五年十二月　一　日發行　第六號

本號定價　金七拾圓
送料　三圓

禁　轉　載

編集兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部内　高村象平
印刷者　東京都千代田區神田多町一ノ七　大橋政雄
印刷所　東京都目黒區平町一六六　富士精版印刷社

豫約購讀料一年分　金八四〇圓（送料共）
半ヶ年分　金四二〇圓（〃）
豫約購讀料は發賣所宛お拂込み下さい。
誌代變更の場合は精算決濟致します。
編集に關する用件は發行所へ。
營業に關する用件、購賣申込は發賣所へ願います。

發行所　東京都港區芝三田二丁目　慶應義塾大學經濟學部研究室内　慶應義塾經濟學會
發賣所　東京都新宿區角筈一丁目八二六番地　紀伊國屋書店
日本出版協會員B一一一〇一六
日本出版協會員A一一一〇一九